

す。金蛇、金駝等の物を進め、以て媚を陳氏に取る。皇太子廃立の際、頗る力有り)

(了)

【附記】 本稿は、科研費基盤研究(C)「周縁テキスト(注釈・翻訳)の自立性をめぐる歴史的・理論的研究」(課題番号 15K04258)の研究
成果の一部である。

【書き下し文】

開成の初め、宮中に黄色蛇有り、夜は則ち宝庫より出で、階陞の間に遊び、光明照り耀くも、擒獲すべからず。宮人珊瑚玦を擲ちて以て之を繋ぐに、遂に玦を弁はせて亡げ去る。庫を掌る者具さに事を以て告ぐ。上命じて遍く庫内を捜さしめ、黄金蛇を得るに玦其の首を貫く。上之を熟視し、「昔隋の煬帝晋王為りし時、黄金蛇を以て陳夫人に贈る。吾今此の蛇の何れの処より得たるかを知らず」と。左右因りて額の下を視るに、阿廢の字有り。上蹶然として曰はく、「果たして朕の疑ふ所なり。阿廢は即ち煬帝の小字なり」と。上の博学敏悟なるは、率ね多く此の類なり。遂に命じて玻璃の連環を取り、蛇を玉鏝の前足に係ぐ。其の後竟に復た見る所有らず、以ふに鏝蛇を食らふなり。(出『杜陽雜編』)

【語釈】

○開成 唐の第十四代皇帝文宗(在位八二六―八四〇)の年号。八三六年―八四〇年。○珊瑚玦 珊瑚でできた、身に帯びる玉器。「玦」とは、ドーナツ状で一箇所が欠けている形状の玉器をいう。○上 ここでは文宗のこと。○煬帝 隋の第二代皇帝。文帝楊堅の第二子。在位六〇四―六一七。姓名は楊広、煬は諡である。文帝のもとで晋王に封ぜられた。○以黄金蛇贈陳夫人 「陳夫人」は、隋文帝楊堅の夫人。南朝陳の宣帝の娘で、容姿は美しく、並ぶものがないほどであった。『隋書』卷三十六に伝がある。また、この煬帝が陳夫人に黄金蛇を贈った故事もまた、『隋書』に記されている。【補説】参照。○蹶然 驚きあわてて立ち上がる様。『礼記』卷二九「孔子問居」に、「子夏蹶然而起(子夏蹶然として起つ)」とある。○阿廢 煬帝の幼名。『隋書』卷三「煬帝紀」に、「煬皇帝諱廣、一名英、小字阿廢、高祖第二子也(煬皇帝

諱は広、一名英、小字阿廢、高祖の第二子なり)」とある。

【現代語訳】

開成の初め、宮中に黄金でできた蛇があった。夜になると宝物庫の中から出て、宮殿の階段の間で遊んでいたが、光が照り輝くも捕まえることはできなかった。宮人が珊瑚玦を投げつけて、これを捕まえたが(金蛇は)玦とともにいなくなってしまった。金庫番はつぶさにその出来事を報告した。文宗皇帝は金庫の中をくまなく探させ、黄金蛇をみつけたが玦はその首にかかっていた。帝はこれをじっくりと検分して言った、「昔隋の煬帝が晋王だった時、黄金蛇を陳夫人に贈っている。だが私はいまこの蛇がどこから手に入れたものなのかは分からない。」と。近侍の者たちがその額を見ると、そこには「阿廢」の字があった。帝はあわてて言った、「やはり私の疑ったとおりであった。『阿廢』とは煬帝の幼名である。」と。帝が博学で聡明であることは、おおよそのようであった。かくして命じてガラスでできた連環をもって来させ、蛇を玉でできた豚の前足に繫いだ。その後とうとう再び見ることはなかったが、それは思うに豚が蛇を食べてしまったからであろう。

【補説】

《黄金蛇と陳夫人》 煬帝がまだ晋王だった頃、皇太子廢立の際に後ろだてになってもらおうと、彼が父である文宗の愛妾であった陳夫人に金蛇などを贈っていたと、『隋書』卷三十六「宣華夫人陳氏伝」に記されている。参考までに、該当箇所原文と訓読を挙げておく。

晋王廣之在藩也、陰有奪宗之計、規為内助、每致禮焉。進金蛇、金蛇等物、以取媚於陳氏。皇太子廢立之際、頗有力焉。(晋王広の藩に在るや、陰かに奪宗の計有り、規りて内助を為し、毎に礼を致

こと巨萬にして、^{へききけんてい}鉅規兼呈す」とあり、劉達注に「鏹、錢貫也（鏹は、錢貫なり）」という。○環 銅錢をいう。『酉陽雜俎校箋』注に、「環」

亦作『環』、即銅錢（「環」、亦た「環」に作る、即ち銅錢なり）」とあり、『酉陽雜俎』続集卷二支諾臯中「韓幹」の「建中初、有人牽馬訪馬醫、稱馬患脚、以二千環求治（建中の初め、人有り馬を牽きて馬医を訪ね、馬の脚を患らふと称へ、二千環を以て治を求む）」を引く。○復舊

会校本は「復如舊」に作る。○喧悻 うるさくて落ち着かないさま。

○鋌 かたまりになったものを数える語。○模鑄 型にはめて鑄造すること。用例未見。北京燕山記は、「象是鑄进去的一样」と、天津古籍

訳は、「就像按模型澆注成的」と、それぞれ訳している。○所函挺處・挺各長三寸餘 「挺」は、まっすぐな物を数える語。ここでは、前の「鋌」と同様の意であろう。会校本は陳本に従い、ともに「鋌」に改めている。

○洛陽會節坊 底本は「洛惠節坊」に作るが、洛陽に「惠節坊」の名は見えない。会校本及び『酉陽雜俎』に拠って改めた。「會節坊」は、洛陽定鼎門街の東第七街、街東の南から北に向かって第四坊であった。『唐兩京城坊考』卷五「東京外郭城」参照。○段成式 ？ 八六三年。字は柯古、臨淄（山東省）の人。本話を収める晩唐の小説集『酉陽雜俎』の編者。『新唐書』卷一百六十七「段文昌伝」、『新唐書』卷八十九「段志玄伝」に事迹が見える。○紉針 衣服を縫製することをいう。○

出酉陽雜俎 本話は、『酉陽雜俎』続集卷三支諾臯下に収める。

【現代語訳】

汴州の人趙懷正は、長安の光徳坊に住んでいた。太和三（八二九）年、妻の賀はいつも裁縫などの手仕事でお金を得ていた。ある日、石の枕を手に売りに来た者があり、賀は一差しの銅錢でそれを手に入れた。趙は夜これを枕にしていたところ、枕の中に風や雨のような音を感じ、そこ

で妻子にそれぞれ一晚これを枕にさせてみたが、彼らは何も感じなかった。しかし、趙が枕とすればもとにもどってしまうのであった。また、時にはうるさくて眠ることができないほどであった。彼の子どもは壊して中を見るように頼んだが、趙は、「もしこれを壊して何も見つからなければ、一百の利益を棄てることになってしまう。私の死ぬのを待って、お前は必ずこれを壊すように。」と言った。

一年あまりたつて、趙は病気で亡くなった。妻がこれを壊して中を見させたところ、中には金塊銀塊がそれぞれ一本ずつ入っており、型にはめて鑄造したもののようであった。金塊銀塊の入っていた所は、その鑄型があらかじめ考えて入れてあったかのように、髪の毛の入る隙間もないくらいぴたりで、どこから入れたのか分からなかった。一本はそれぞれ長さが三寸あまり、幅は大きな指のようであった。かくしてこれを売って葬儀と借金処理にあてたが、一銭も残らなかった。賀はいま洛陽の會節坊に住んでいる。段成式の家人が彼女を針仕事に雇ったとき、直接その話を聞いたという。

20 「金蛇」

開成初、宮中有黃色蛇、夜則自寶庫中出、遊於階陛間、光明照耀、不可擒獲。宮人擲珊瑚玦以繫之、遂并玦亡去。掌庫者具以事告。上命遍搜庫內、得黃金蛇而玦貫其首。上熟視之、「昔隋煬帝爲晉王時、以黃金蛇贈陳夫人。吾今不知此蛇得自何處。」左右因視額下、有阿摩字。上蹶然曰、「果不失朕所疑。阿摩即煬帝小字也。」上之博學敏悟、率多此類。遂命取玻璃連環、係蛇於玉蟲之前足。其後竟不復有所見、以爲食蛇也。（出『杜陽雜編』）

現れたが、形は兎のようでその色はまるで純金のように、光に従って出て来て、祭壇の周囲を長い間ぐるぐると回って、再び井戸の中に入ってしまった。これ以後毎日夕方になると現れた。道士はその出来事を不思議なことであるとして、誰にも言わなかった。その後井戸をさらって、一つの金の兎を手に入れた。大変小さく、不思議な光が輝いていたので、すぐに小箱の中に置いた。その時御史の李戎は浦津で仕事に就いていたが、道士と友だちとして親しく付き合っていたので、道士は李戎にこの金の兎を贈った。その後李戎は奉先県令から忻州刺史となった。その金の兎はある日突然どこかに行ってしまう、その後一月あまりして李戎は亡くなった。

【補説】

〈出典〉本話について、底本には出典が記されていない。会校本は孫本、沈本により「出宣室志」と出典を補っている。なお、『宣室志』（稗海所収）においては、本話は補遺に収める。また、本話は『西陽雜俎』前集卷十物異にも見える。

19 「趙懷正」

汴州百姓趙懷正、住光德坊。大和三年、妻賀、常以女工致饑。（鑑字、原闕。據明抄本補）一日、有人攜石枕求售、賀一環獲焉。趙夜枕之、覺枕中如風雨聲、因令妻及子各枕一夕、則無所覺。趙枕輒復舊。或喧悸不得眠。其子請碎視之。趙言、「脱碎之無所見、是棄一百之利也。待我死後、爾必破之。」

經歲餘、趙病死。妻令毀視之、中有金銀各一錠、如模鑄者。所函挺處、其模似預曾勘入、無絲髮隙、不知從何而入也。挺各長三寸餘、闊如巨指。

遂貨之、辦其殮及償債、不餘一錢。賀今住洛陽會節坊。段成式家人雇其紉針、親見其說。（出『西陽雜俎』）

【書き下し文】

汴州の百姓 趙懷正、光德坊に住む。大和三年、妻の賀、常に女工を以て鑑を致す。一日、人有り石枕を携へ售ふを求むるに、賀一環もて獲たり。趙夜に之を枕とするに、枕中に風雨の如き声を覚え、因りて妻及び子をして各々一夕に枕とせしむれば、則ち覚ゆる所無し。趙枕とすれば輒ち旧に復す。或ひは喧悸して眠るを得ず。其の子碎きて之を視るを請ふ。趙言ふ、「脱し之を碎きて見る所無ければ、是れ一百の利を棄つるなり。我の死後を待ちて、爾必ず之を破れ」と。

歳余を経て、趙病死す。妻之を毀り視しむるに、中に金銀各々一錠有り、模鑄の者の如し。挺を函る所の所は、其の模の預め曾て勘へ入るるに似て、絲髪の隙無く、何れより入るるかを知らざるなり。挺各々長さ三寸余り、闊きこと巨指の如し。遂に之を貨り、其の殮及び償債を辦ずるに、一錢を余さず。賀今洛陽の會節坊に住む。段成式の家人其の紉針に雇ひ、親ら其の説を見ゆ。

【語釈】

○汴州 現在の河南省開封市一帯。 ○光德坊 長安朱雀門街の西第二街、街西の北から南に向かって第六坊が光德坊であった。東南隅には京兆府の府庁が置かれていた。『唐兩京城坊考』卷四「西京外郭城右街」参照。 ○大和三年 八二九年。大和については、18「虞鄉道士」【語釈】参照。 ○賀 『西陽雜俎』続集卷三支諾臯下では、「阿賀」に作る。 ○女工 縫い物や刺繍などの女性の手仕事。 ○鑑 錢さしで通した錢。左思「蜀都賦」（『文選』卷四）に、「藏鑑巨萬、鉞規兼呈（鑑を藏むる

因淘井、得一金兔。甚小、奇光爛然、即置于巾箱中。時御史李戎職於蒲津、與道士友善、道士因以遺之。其後戎自奉先縣令爲忻州刺史。其金兔忽亡去、後月餘而戎卒。

【書き下し文】

虞郷に山觀有り、甚だ幽寂にして、滌陽道士の居有り。大和中、道士嘗て一夕独り壇に登りて望むに、庭に忽ち異光の井泉中自り発する有るを見る。俄かに一物有り、状は兔の如く、其の色は精金の若く、光に随ひて出で、醺壇を環繞すること之を久しうして、復た井に入る。是れより毎夕輒ち見る。道士其の事を異とし、敢へて人に告げず。後に井を淘ふに因りて、一金兔を得たり。甚だ小さく、奇光爛然たり、即ち巾箱中に置く。時に御史李戎蒲津を職り、道士と友として善く、道士因りて以て之を遺る。其の後戎奉先縣令より忻州刺史と爲る。其の金兔忽ち亡げ去り、後月余にして戎卒す。

【語釈】

○虞郷 今の山西省永済の東北。『旧唐書』地理志二に、「虞郷、漢解縣地、後魏分置虞郷縣。貞觀十七年、復置解縣、省虞郷。天授二年、復分置解縣置虞郷縣（虞郷、漢の解縣の地なり、後魏分ちて虞郷縣を置く。貞觀十七年、復た解縣を置き、虞郷を省す。天授二年、復た解縣を分ちて虞郷縣を置く）」とある。○山觀 山中の道觀。○滌陽道士 道士の名。どのような人物であったかは未詳。○大和 唐の第十四代皇帝玄宗李昂（在位は八二六～八四〇）の年号。太和ともいう。八二七年～八三五年。○壇 道士が祭祀などの儀式を行う、土で築かれた高い台。○見庭 「見」字、会校本は「觀」に作る。○醺壇 道士が祭祀をおこなう祭壇。『吳清妻』（『太平広記』卷六七引『逸史』）に、「日

落焚香坐醺壇、庭花露濕漸更闌。淨水仙童調玉液、春霄羽客化金丹（日落ち香を焚きて醺壇に坐し、庭花露濕ひて漸く更に闌なり。淨水もて仙童玉液を調し、春霄もて羽客金丹を化す）」とある。○環繞 周囲をぐるぐるとめぐること。○精金 精鍊された金屬。ここでは、純金をいう。○淘井 井戸などのにたまつた泥土や汚水をくみ出すこと。

○金兔 黄金のうさぎ。○爛然 光輝きあざやかなさま。○巾箱 書卷や文書などを入れる小箱。○李戎 元和、長慶の頃の人。草書や隸書に巧みで世に知られた。司空図「書屏記」（『司空表聖文集』四部叢刊所収）に、「元和、長慶間、先大夫初以詩師友兵部盧公戴、從事於商於。因題記唱和、乃以書受知於裴公休、辟倅鍾陵。及徵拜侍御史、退居中條。時李忻州戎亦以草隸著稱、爲計吏在蒲、因輟所寶徐公浩眞跡一屏、以爲祝壽。凡四十二幅、八體皆備、所題多文選五言（元和、長慶の間、先大夫初め詩を以て兵部盧公戴と師友たり、商於に従事す。題記唱和に因り、乃ち書を以て知を裴公休に受け、辟されて鍾陵に倅たり。徵されて侍御史を拝するに及び、中條に退居す。時に李忻州戎亦た草隸を以て称を著し、計吏と爲りて蒲に在り、因つて宝とする所の徐公浩の眞跡一屏を輟め、以て祝壽と爲す。凡そ四十二幅、八体皆な備はり、題する所の多くは文選五言たり）」とある。○蒲津 蒲州黃河流域の渡し場。転じてここでは蒲州のことをいう。今の山西省永済県一帯。○奉先 県名。今の陝西省蒲城県。○忻州 今の山西省忻州市一帯。

【現代語訳】

虞郷の山中には道觀があり、大変奥深くひっそりした場所であったが、そこに滌陽道士の住居があった。大和（八二七～八三五）のころ、道士はかつてある夕方にひとりで祭壇に登って遠くを眺めていたところ、庭で突然不思議な光が井戸の中から出ているのを見た。突然何かが

風輕、蓮舌冷冷詞調新(壁月夜満ち楼風輕やかに、蓮舌冷冷として詞調新たなり)とある。○**磬中鳴** 「磬」は石で作られた楽器の一種。「磬中鳴」で、小型の磬を意味するか。『隋書』卷十四「音楽志中」に、「大鼓、長鳴工人、卑地莖文、金鉦、桐鼓、小鼓、中鳴、吳横吹工人、青地莖文。(大鼓、長鳴の工人は、卑地莖文なり、金鉦、桐鼓、小鼓、中鳴、吳横吹の工人は、青地莖文なり)」とあり、中鳴は長鳴に比して小型であることを意味するのであろう。○**懷越** もの悲しい高い音。○**甚雨** 大雨。○**奇古** 珍しくて古めかしいさま。○**與金之缶甚異** 「金」字を、会校本は孫本等に拠り「今」字に改める。○**隱然有文** 「隱然」は、かすかではっきりしないさま。缶には文字が書かれていたが、はつきりとは見えなかった。○**滌去** 水などで汚れを落とすこと。○**塵蘇塵** 塵やこけ。○**崔子玉座右銘也** 「崔子玉」は、後漢の崔瑗のこと。文辭にすぐれ、とりわけ書、記、箴、銘を善くした。『後漢書』卷五十二に伝がある。また、崔瑗「座右銘」は、『文選』卷五十六に収める。なお、この箇所を会校本は『宣室志』に従い、「崔子玉古磬銘也」と改めている。

【現代語訳】

進士の李員は、河東の人であるが、長安の延寿里に住んでいた。元年間の初夏のある日の夕方、員はひとりで部屋にいた。ベッドに入っとうとうしていると、突然部屋の西のすみにかすかに音がなるのを聞いた。音はかぼそく遠く、カンカンと金石の音楽を奏でるかのようで、こうしたことが長い間止まなかった。突然歌う者がいて、その歌声はとても澄んでいて高く、よく通ってまた長く止まなかった。員はこっそりその歌詞を書きとめておいたが、それは次のようなものだった。

色は藍の葉の青とは異なり

音は小型の磬けいのよう

七月七日に

私はあなたにその形を示しましょう

歌いおわると、その音楽は止んだ。員は驚きまた不思議に思った。太陽がのぼると、家の召使いに命じてその跡を調べさせたが、何も得ることはできなかった。この日の夕べ、員はひとりしていると、またその音を聞いたが、もの悲しくよく響きそのうえ長い時間にわたったが、歌は前日のものようであった。歌がおわると、員は心の中でそれが怪異であるとするや、ひそかにこの出来事を怪しく思った。だいたい数晩にわたってこのような音楽を聞いたのであった。その後秋になり、最初の六日は夜に大雨が降って、その堂の北の垣根が倒れた。次の日垣根の北にまたその音を聞いた。員は驚いてそこを見たところ、北の垣根の下で一つの缶を手に入れた。大きさはわずかに一尺あまり、金を用いて造られており、その形状は珍しくまた古めかしくて、普通の金の缶とは大変異なっていた。苔はその光を覆い隠し、その下にはかすかに文字があったが、それを見てもはつきりと読むことはできず、千百年はたつていようかという楽器であった。これを叩けば、その音はきわめて長く響いた。すぐに命じて塵や苔を洗い清めさせると、(その下にあった字が)読むことができるようになったが、字はみな小篆の字体であり、崔子玉の「座右銘」であった。員はこの楽器を手に入れてこれを不思議な出来事であると考えたが、ついにいつの時代に造られたものなのかはわからなかった。

18 「虞郷道士」

虞郷有山觀、甚幽寂、有滌陽道士居焉。大和中、道士嘗一夕獨登壇望、見庭忽有異光自井泉中發。俄有一物、狀若兔、其色若精金、隨光而出、環繞醮壇久之、復入于井。自是每夕輒見。道士異其事、不敢告於人。後

偃於榻、寐未熟、忽聞室之西隅有微聲。纖而遠、鏘然若韻金石樂、如是久不絕。俄而有歌者、其音極清越、冷泠然、又久不已。員竊誌其歌詞曰、「色分藍葉青、聲比磬中鳴、七月初七日、吾當示汝形」歌竟、其音闕。員且驚且異。朝日、命家僮窮其跡、不能得焉。是夕、員方獨處、又聞其聲、悽越且久、亦歌如前。詞竟、員心知爲怪也、默然異之。如是凡數夕、亦聞焉。後至秋、始六日、夜有甚雨、隕其堂之北垣。明日、垣北又聞其聲、員驚而視之、於北垣下得一缶。僅尺餘、制用金成、形狀奇古、與金之缶甚異。苔翳其光、隱然有文、視不可見、蓋千百年之器也。叩之、則其韻極長。卽命滌去塵蘚、方可讀之。字皆小篆書。乃崔子玉座右銘也。員得而異之、然竟不知何代所製也。(出『宣室志』)

【書き下し文】

進士李員、河東の人なり、長安延壽里に居る。元和初夏の一夕、員独り其の室に処る。方に榻に偃し、寐ねて未だ熟せざるに、忽ち室の西隅に微声あるを聞く。纖さくして遠く、鏘然として金石の樂を韻するが若く、是の如く久しくして絶えず。俄かにして歌ふ者有り。其の音極めて清越、冷泠然として、又た久しく已まず。員竊かに其の歌詞を誌して曰はく、「色は藍葉の青を分かち、声は磬中の鳴に比す。七月初七日、吾当に汝に形を示すべし」と。歌ひ竟はりて、其の音闕む。員且つ驚き且つ異とす。朝日、家僮に命じて其の跡を窮めしむるも、得ること能はず。是の夕、員方に独り処り、又た其の声を聞くに、悽越にして且つ久しく、亦た歌ふこと前の如し。詞竟はり、員心に怪爲るを知るや、默然として之を異とす。是の如きこと凡そ数夕、亦た聞く。後秋に至り、始めの六日、夜甚雨有り、其の堂の北垣を隕す。明日、垣の北に又た其の声を聞く。員驚きて之を視るに、北垣の下に一缶を得たり。僅かに尺余、制るに金を用ひて成り、形状は奇古、金の缶と甚だ

異なれり。苔は其の光を翳ひ、隱然と文有り、視るも見るべからず、蓋し千百年の器なり。之を叩けば、則ち其の韻極めて長し。即ち命じて塵蘚を滌去せしむるに、方に之を読むこと可なり。字は皆な小篆の書、乃ち崔子玉の座右銘なり。員得て之を異とし、然るに竟に何れの代の製る所かを知らざるなり。

【語釈】

○李員 未詳。 ○河東 郡名。現在の山西省永濟市の西。 ○延壽里 朱雀門街の西第三街、皇城の西第一街、街西の北から第五坊の延壽坊のこと。徐松『唐兩京城坊考』卷四参照。 ○偃於榻 ベッドに仰向けに寝る。「偃」は仰向けに寝ること。「榻」は寝台のこと。 ○鏘然 金属や石などが当たることによって起こる澄んだ音。「葉法善」(『太平広記』卷二十六引『集異記』及『仙伝拾遺』)に、「開元初、正月望夜、玄宗移仗于上陽宮以觀燈。尚方匠毛順心、結構綵樓三十餘間、金翠珠玉、間廁其内、樓高百五十尺、微風所觸、鏘然成韻(開元の初め、正月望夜、玄宗仗を上陽宮に移し以て觀灯す。尚方の匠毛順心、綵樓三十余間を結構し、金翠珠玉、其の内に間廁す。樓の高さ百五十尺、微風触るる所、鏘然として韻を成す)」とある。 ○韻金石樂 金石の音楽を奏でる。「韻」は音を響かせること。『宋書』卷九「後廢帝紀」に、「未嘗吹簫、執管便韻(未だ嘗て簫を吹かず、管を執りて便ち韻す)」とある。また、前の「鏘然」の語釈も参照。「金石樂」は、鐘や磬などの金属や石で作られた樂器で奏でられる音楽のこと。 ○俄而 『会校本』は「俄又」に作る。 ○清越 澄んだ高い音。『礼記』卷六十三「聘義」に、「叩之其聲清越以長、其終詘然樂也(之を叩くに其の声清越にして以て長く、其の終はり詘然たるは樂なり)」とある。 ○冷泠 音が澄んでよくとおるさま。王穀「玉樹曲」(『全唐詩』卷六百九十四)に、「璧月夜滿樓

値する、ということ。○兌 西の方角。八卦で「兌」は西方を意味する。○合符 割り符が一致すること。古代、竹や金属で符作りその上に文字を刻み、それを二つに割って割り符とした。○宣室志 会校本の注に、「原作『寶室志』。當作『宣室志』。陳本作『宣室志』」とある。

【現代語訳】

宝応年間に、京兆に韋思玄という男がいたが、洛陽に仮住まいしていた。性格は奇を好み、いつも神仙の術にあこがれていた。その後嵩山に遊んだとき、一人の道士が教えて言った、「そもそも金液を服用する者は、寿命を延ばすことができる。あなたはまず鍊金の術を学ぶべきだ。そうすれば赤松子と肩を並べ、広成子を凌駕することができるだろう。」と。思玄はそこで鍊金の術を求めること十年、数百人の術士に会ったが、とうとう術の一番大事な本質を得ることはできなかった。その後のある日、容貌はとても清らかで痩せていて、おどおどとして寒そうな様子の、破れてぼろぼろの皮衣を着た居士の辛鋭という者が、思玄の家の門を叩いて、思玄に言った、「私は病氣にかかった居士です。どうにもこうにももう帰るところはありません。あなたは古を好み奇を尚び、天下の異人や方士を集めていらつしやると聞いております。ですから私はお目にかかりにやって来たのです。どうか私を先生の所の一員にお加えください。」と。思玄はすぐに居士を宿舎に泊ませた。その後居士は病氣を患い、身体の肉がすべてぼろぼろにただれ、血もまた激しく流れ、韋氏一家はみな彼のことを疎ましく思った。思玄はいつも術士数人を招いて食事を共にしていたが、居士は招かれることはなかった。すでに食事の用意が整った頃、居士は突然客の前にやって来て、むしろの上に小便をしてすべてを濡らしてしまった。客は怒ってみな立ちあがり、韋氏の召使いもまた争うようにやって来て彼を罵った。居士はかくて別れを

告げ、庭に行くと忽然と姿を消した。思玄は客たちとこれが大変不思議なことであるとしたり。そしてその小便は紫金であった。不思議な光が輝いていて、まことに類を見ない宝玉であった。思玄は驚き嘆いた。この不思議な出来事の意味を理解した者がいて言った、「居士は紫金の精だったのです。その名前を考えてみればわかります。辛という姓は思うに西方の庚辛金のことです。鋭という字は金に兌と書きますが、兌はまた西の方角を意味します。このようにその意味を考えれば、私の解釈が実際に起きた出来事と割り符が一致するかのようにぴたりと合致いたしましたしょう。」と。

【補説】

〈汚れと金〉小便などの汚物が金に変わるというモチーフは、中国のみならず世界中でしばしば語られるものである。中国においてよく知られているのは、『録異伝』に載せる如願故事であろう。06「雫都縣人」【補説】参照。

また、居士が皮膚がぼろぼろにただれる病氣となり人々から蔑まれる一方、彼の小便が黄金に変わるという展開は、居士の持つ聖と賤の両義性を巧みに表現していて興味深い。

さらにこの話は、日本の「光明皇后の千人施浴」伝説（『元亨釋書』巻第十八）などともよく似ている。居士と西方との関わりが暗示されていることなどからも、本話には仏教説話からの影響も考えられるが、いまそれ以上論じる材料を持たない。今後の課題としたい。

17 「李員」

進士李員、河東人也、居長安延壽里。元和初夏一夕、員獨處其室。方

む。思玄嘗に術士数人を詔して会食す、而れども居士預かるを得ず。既に膳を具ふるに、居士突かに客の前に至り、筵席の上に溺し、尽く湿らす。客怒りて皆な起ち、韋氏の家僮も亦た競ひ来たりて之を罵る。居士遂に去るを告げ、行きて庭に至るに、忽ち見る所亡し。思玄諸客と甚だ之を異とす。是に因りて其の溺、乃ち紫金なり。奇光璨然として、真に曠代の宝なり。思玄且つ驚き且つ歎く。解く者有りて曰はく、「居士は紫金の精なり。其の名氏を徴むれば信あり、且つ辛は蓋し西方の庚辛金なり、而るに鋭の字は兌、金に従ふ。兌も亦た西方の正位なり。其の義を推せば、則ち吾の解は符に合するが若く然り」と。

【語釈】

○寶應 唐の第七代皇帝肅宗（在位は七五六年～七六二年）及び第八代皇帝代宗（在位は七六二年～七七九年）の年号。七六二年～七六三年。

○京兆 京兆府。長安を指す。

○僑居 他郷に仮住まいすること。

○嵩山 河南省登封県の北にある名山。中国を代表する五岳の中岳にあたる。○餌金液 「餌」は「服餌」のこと。薬物などを摂ることに

よって養生することをいう。「金液」は、金を液化したもの。飲めば仙人になれるという。『抱朴子内篇』巻四「金丹」に、「抱朴子曰、金液太乙所服而仙者也。不減九丹矣、合之用古秤黄金一斤、并用玄明龍膏、太乙旬首中石、冰石、紫遊女、玄水液、金化石、丹砂、封之成水。其經云、金液入口、則其身皆金色（抱朴子曰はく、金液太乙の服して仙となる所の者なり。九丹より減ぜず、之を合するに古秤の黄金一斤を用ひ、并せて玄明龍膏、太乙旬首中石、冰石、紫遊女、玄水液、金化石、丹砂を用ひて、之を封じて水と成す。其の經に云ふ、金液口より入れば、則ち其の身皆な金色なり、と）」とある。○赤松子 古の仙人の名。神農のころの雨師であったという。『列仙伝』巻上参照。○廣成 古の

仙人広成子のこと。崆峒山上の石室の中に住んでいたという。『神仙伝』巻一参照。○居士 在野にあつて仙道の修行をしている者。○愀然

不安になって心配するさま。『荀子』修身篇に、「見不善、愀然必以自省也（不善を見るとときは、愀然として必ず以て自ら省みるなり）」とある。

ここでは、おどおどした様子をいうのであろう。底本は「愀然」に作るが、意味が通らないので会校本の指摘に従い字を改めた。○寒色 寒

そうな様子。ここでは、辛鋭の様子がみすばらしいことを言う。○弊 破れてぼろぼろになった皮衣。○病士 病氣にかかった処士。も

と「病亡」に作るを、中華書局本は明鈔本に拠って「病士」に改めている。一方、会校本は「病甚」と改め、「原作『亡』」。沈本作「士」。現拠「宣

室志」改」と注している。これだと「病が重く」の意になる。いまとりあえず、底本に従う。○異人方士 「異人」は、尋常ではない才を持つ人。「方士」は方術の士。○臃盡潰血且甚 「臃」は本来肉を煮込んだ

であつものをいう。「潰」は身体組織がただれ、ぼろぼろになること。ここでは、「臃盡潰」で身体肉がぼろぼろになった様子を言うか。な

お、この六字を会校本は「宣室志」に拠り「癰盡潰、血穢甚」と改める。「癰」は悪性の腫れ物のこと。これだと、「悪性の腫れ物がことごとくた

だれ、流れる血で身体がたいへんけがれていた」という意になる。○詔 呼び寄せて会う。会校本は孫本等に拠って「召」に改める。○因

是其溺 「溺」は、小便をまき散らすこと。なお、会校本は孫本等に拠り「是」を「視」に改める。○紫金 銅合金の一種である赤銅のこと。

03 「霍光」語釈参照。○曠代 類をみない。謝靈運「傷己賦」（『藝文類聚』巻三四）に、「丁曠代之渥惠、遭謬眷於君子（曠代の渥き恵みに丁り、謬りて君子に眷らるるに遭ふ）」とある。○徵其名氏信矣 「名氏」

は姓名のこと、「徵」は深く考え追求することをいう。「辛鋭」という居士の名前を深く考えてみれば、彼が「紫金の精」であることは信じるに

下。「汝誰也。」曰、「我杵也。在竈下。」及曉、文按次掘之、得金銀各五百斤、錢千餘萬。仍取杵焚之。宅遂清安。（魏郡の張奮は、家巨富なり。後 暴かに衰へ、遂に宅を売りにて黎陽の程家に与ふ。文程入りて居るに、死病相繼ぐ。転じ売りにて鄴人の何文に与ふ。文日暮れ、乃ち刀を持ち、北堂中の梁上に上りて坐す。二更の竟りに至り、忽ち一人を見る。長丈余、高冠黄衣にして、堂に升り呼びて問ふ、「細腰、舍中何を以て生人の氣有るや」と。答へて曰く、「之無し」と。須臾にして、一の高冠青衣なる者有り。之に次ぎて、又高冠白衣なる者有り。問答並びに前の如し。將に曙^あけんとするに及び、文乃ち堂中に下り、向の法の如くにして之を呼ぶ。問ひて曰く、「黄衣なる者は誰ぞや」と。曰く、「金なり。堂の西壁の下に在り」と。「青衣なる者は誰ぞや」と。曰く、「銀なり。堂前の井辺五歩に在り」と。「白衣なる者は誰ぞや」と。曰く、「我は杵なり。北の角の柱の下に在り」と。「汝は誰ぞや」と。曰く、「我は杵なり。竈の下に在り」と。曉に及び、文 次を按じて之を掘り、金銀各おの五百斤、錢千余万を得たり。仍りて杵を取りて之を焚く。宅遂に清安なり。）

また、こうした凶宅の怪異を退治する話は、『搜神記』巻十八「宋大賢」、『搜神記』巻十八「安陽亭」、『搜神記』巻一九「何銅」など、非常に多く見られる。

《器物の怪》一方、この話は金や爛木といったモノが妖怪化し、人間に禍をもたらすという「器物の怪」を語った話でもある。器物の怪に関しては、07「何文」【補説】参照。

16 「韋思玄」

寶應中、有京兆韋思玄、僑居洛陽。性尚奇、嘗慕神仙之術、後遊嵩山、有道士教曰、「夫餌金液者、可以延壽。吾子當先學煉金、如是則可以肩赤松、駕廣成矣。」思玄於是求煉金之術、積十年、遇術士數百、終不能得其妙。後一日、有居士辛銳者、貌甚清瘦、愀然有寒色、衣弊裘、叩思玄門、謂思玄曰、「吾病士（士、原作亡。據明抄本改）、窮無所歸。聞先生好古尚奇、集天下異人方士。我故來謁耳。願先生納之。」思玄即止居士於舍。其後居士身疾、臚盡潰血且甚、韋氏一家盡惡之。思玄嘗詔術士數人會食、而居士不得預。既具膳、居士突至客前、溺於筵席上、盡濕。客怒皆起、韋氏家僮亦競來罵之。居士遂告去、行至庭、忽亡所見。思玄與諸客甚異之。因是其溺、乃紫金也。奇光璨然、眞曠代之寶。思玄且驚且歎。有解者曰、「居士紫金精也。徵其名氏信矣、且辛者蓋西方庚辛金也、而銳字兌從金。兌亦西方之正位。推其義、則吾之解若合符然。」（出『宣室志』）

【書き下し文】

宝應中、京兆の韋思玄なるもの有り、洛陽に僑居す。性は奇を尚^{たふと}び、嘗^{つね}に神仙の術を慕^{した}ふ。後に嵩山に遊ぶに、道士有り教へて曰はく、「夫れ金液を餌^くらふ者は、以て寿を延ばすべし。吾子当に先に煉金を学ぶべし、是の如くせば則ち以て赤松に肩し、広成を駕^{しの}ぐべし」と。思玄是に於て煉金の術を求め、積むこと十年、術士數百に遇^あふも、終に其の妙を得ること能はず。後一日、居士の辛銳なる者有り、貌は甚だ清瘦、愀^{しうげん}然として寒色有り、弊裘を衣^き、思玄の門を叩き、思玄に謂ひて曰はく、「吾は病の士なり、窮^{きは}まりて帰る所無し。聞くならく先生古を好み奇を尚^{たふと}び、天下の異人・方士を集む、と。我故に來たりて謁するのみ。願はくは先生之を納れよ」と。思玄即ち居士を舍に止^とまらしむ。其の後居士身疾^やみ、臚^{しう}は尽^こく潰^{つぶ}え血且つ甚だしく、韋氏の一家尽く之を惡^{にく}む。

者がいたが、誠実な人物であったが貧しさに苦しみ、この家のことを知り安い値段で元の持ち主からこの家を借りた。ただ契約をかわしただけで、いまだ一銭のお金も持ち主には支払っていないかった。彼は夕方になると、自分でベッドを手にして、大広間に向かって置いて寝た。二時間たってもまだ眠れなかったので、大広間から出て、ぶらぶらと歩いていった。すると突然東の垣根の下に赤いもの一つあるのを見たが、それは人の形のように、手足が無く、表から裏まで光を通していた。そしてそれが「おい。」と呼びかけた。遏はこれを見たが動かなかった。しばらくして、それがまた声をおさえて呼びかけた、「爛木よ、おい。」と。西の垣根の下に何者かがいて、答えていった、「おう。」と。赤物が問いかけた、「何者だ。」と。「知らない。」また言った、「ゴーン。」と。爛木は答えて言った、「すばらしい。」と。しばらくすると、赤物のいる場所がわからなくなった。遏は階段を下りて、中庭で爛木を呼んで言った、「金精は私に会っているはずだ、どうして大きな声を出したのだろうか。」と。爛木が答えて言った、「わからない。」遏はまた「以前に人を殺したやつはどこにいるのだ。」と問うた。爛木が言った、「他に別の者がいるわけではない、ただ金精がいるだけだ。彼らの福はそもそも薄く、ここに住むことにうまく適応できずに死んでしまったのであって、これまで殺したり傷つけたりしたことはない。」と。

夜が明けたが、それ以上何も起こらなかった。遏はそこでみずから土を起す農具を借りて、まず西の垣根の下を掘った。地面から三尺ほど掘ったところで、一本の朽ちた柱を見つけたが、柱の中心は血の色のようで、堅いことは石のようであった。その後また、東の垣根の下を掘ること二日、ほとんど一丈に達したとき、一つの四角い石を見つけた。それは広さが一丈四寸、長さが一丈八寸であった。石の上には篆書で、「夏の天子が紫金三十斤を、徳ある者（有徳者）に与える。」と刻まれ

ていた。遏は「自分は何か徳をなしたであろうか。」と自問自答した。また考えをめぐらせて言った、「私はこの宝を得て、そしてそのあとに徳を修めたなら良くないことは起こらないはずだ。」と。こうしてためらってどうするか決めることができなかった。夜になっても、またため息をつくだけで決まらない。突然その爛木が話しかけて言った、「どうして名前を有徳と改めないのか。そうすれば問題なかるう。」と。遏は言った、「それは良い。」かくして有徳と称したのである。爛木は言った、「おまえがもし私を昆明池に送って行ってくれば、これ以降二度と私は人を惑わさぬ。」と。有徳はこれを許した。明くる日さらに一丈あまり掘ると、一つの鉄の甕を手に入れた。これを開くと紫金三十斤を得た。有徳はそこで家賃を支払い家を修理し、爛木を昆明池に送り届けた。そして戸を閉めて学問に励んだ。三年たつて、范陽に請われて彼の幕下に入り、七年もたたない間に冀州刺史の地位を得た。その家には、これ以降何事も起こらなかった。

【補説】

〈凶宅捉怪得宝故事〉本話は、凶事の起こる家に引越した者が最終的に富を得るという話である。本話の類話としては、『列異伝』の「張奮」がまず挙げられよう。次のような話である。

魏郡張奮者、家巨富。後暴衰、遂賣宅與黎陽程家。程入居、死病相繼。転賣與鄴人何文。文日暮、乃持刀、上北堂中梁上坐。至三更竟、忽見一人。長丈餘、高冠黃衣、升堂呼問、「細腰、舍中何以有生人氣也。」答曰、「無之。」須臾、有一高冠青衣者。次之、又有高冠白衣者。問答並如前。及將曙、文乃下堂中、如向法呼之。問曰、「黃衣者誰也。」曰、「金也。在堂西壁下。」「青衣者誰也。」曰、「錢也。在堂前井邊五步。」「白衣者誰也。」曰、「銀也。在牆東北角柱

曰、狂而不直、侗而不愿、惛惛而不信、吾不知之矣（子曰はく、狂にして直ならず、侗にして愿ならず、惛惛にして信ならずんば、吾れは之を知らず）とある。○**遽苦** うろたえ苦しむこと。○**本主** もとの

持ち主。『北史』卷十「周本紀下」に、「瓦木諸物凡入用者、盡賜百姓。山園之田、各還本主（瓦木諸物凡そ入用の者、尽く百姓に賜ふ。山園の田、各々本主に還す）」とある。○**鋪設** 家具などを設置する。○

一更 約二時間。○**表裏通徹光明** 「通」「徹」はともに「とおす」の意。透明で光を通すさまを言うか。○**咄** 呼びかけのことば。『説文解字』二篇上に、「咄、相謂也（咄、相ひ謂ふなり）」とあり、段注に「謂

欲相語而先驚之之詞（相ひ語らんと欲し先に之を驚かすの詞を謂ふ）」という。○**爛木** 妖怪の呼び名。「朽ちてぼろぼろになった木」の意。本話の後半で明らかになるように、この妖怪は朽ちた柱が化したものであることから、このように呼ばれているのである。○**甚没** どんな。

「甚麼」と同義。当時の口語的な表現。「李陵変文」（『敦煌変文校注』中華書局、一九九七年）に、「單于問、『是甚没人』（單于是問うた、「こいつは誰だ」）とある。なお、会校本は陳本に拠って「甚麼」に改める。○**大硬鏘** よくわからない。ゴーン、カーンのような大きくて強い金属をたたく音をいうか。「鏘」は、金属をたたいて出る音をあらわす擬音語。○**可畏** すばらしい。当時の口語的な表現。江藍生『唐五代語言

詞典』（上海教育出版社、一九九七年）には、「夸贊之詞、相当于『了不起』、『不得了』」とある。一方、天津古籍訳、北京燕山訳、河北訳はすべて、「可怕（恐ろしい）」の意で解釈している。ここでは、赤物（金精）が発した大きな音に感心したと解釈した。○**金精** 金の精（妖怪）。ここでは赤物を指す。なお、この段階ではまだ赤物の正体が紫金であることは明らかにはなっていない。○**屬** 逢う。王鏐『唐宋筆記語辭匯釈（修訂本）』（中華書局、二〇〇一年）に、「属音 zhǔ、遭、逢、動詞」

という。「勤自励」（『太平広記』卷四二八引『広異記』）に、「行八九里、屬暴雨、天晦、進退不可（行くこと八九里、暴雨に属ひ、天晦く、進退可ならず）」とある。○**縁没** なぜ。どうして。「縁何」と同義。当時の口語的表現。『唐五代語言詞典』に、「犹『縁何』、为什么。没、疑問代詞」という。「李陵変文」に、「忽至平川之所、川静草深、李陵報左右

曰、『縁没不攢身入草、避難南帰』（たちまち広々と広がった所に出たが、川は静かで草は深く、李陵は左右の者に知らせて言った、「草に入つて身を隠し、難を避けて南に帰ろう」）」とある。○**承前** 以前。○

紫金 銅合金の一種である赤銅のこと。03「霍光」語釈参照。○**心木** 樹の中心を言うか。用例未見。○**鍬鍤之具** 「鍬」「鍤」とともに「すき」のこと。土を起こす農具。○**近一丈** 一丈は約三・一〇センチメートル。なお、会校本は陳本に拠って「深一丈」に改めている。○**闊一丈四寸、長一丈八尺** 会校本は、孫本等に拠って「闊一尺四寸、長一丈八

寸」に改めている。○**明辰更掘丈餘** 会校本は孫本等に拠って「明辰更彫尺餘」に改めている。○**昆明池** もとは、前漢の武帝が長安の西南郊外の上林苑に作らせた池。唐代には整備され美しい行楽地となっていた。○**撓** 人を惑わす。○**修葺** 建物を修理する。○**范陽** 未詳。○**冀州刺史** 冀州の長官。冀州は、州名。現在の河北省中南部から山東省西端、河南省北端一帯。

【現代語訳】

天宝年間（七四二～七五六）のころ、長安の永樂里に一軒の凶宅があった。そこに住んだ者はみな家産をつぶしてしまい、その後そこに住む人はいなかった。人がやって来ても、また一晩もしないうちに死んでしまい、かくして家は荒れるがままとなった。その建物にはただ大広間だけが残っており、草木がたいへん生い茂っていた。扶風に蘇遏という

異志〕

【書き下し文】

天室中、長安の永樂里に一凶宅有り、居る者皆な破れ、後に復た人の住む無し。暫くして至るに、亦た宿を過ぎずして卒し、遂に廢破に至る。其の舍宇唯だ堂庁のみ存し、因つて草樹の生ずること甚だ多し。扶風の蘇遏なるもの有り、慳慳にして貧窮に遽苦し、之を知り、乃ち賤価を以て、本主より之を質す。纔かに契書を立つも、未だ一錢も主に帰するに有らず。夕に至り、乃ち自ら一榻を携へ、堂に当たりて鋪設して寝ぬ。一更已後、未だ寝ねずして、堂より出でて、傍徨して行く。忽ち東牆の下に一赤物有るを見るに、人の形の如くして、手足無く、表裏に光明を通徹す。而して叫びて曰はく、「咄」と。遏之を視るも動かず。良久しくして、又た声を按さへて呼びて曰はく、「爛木、咄」と。西牆の下に物有り応へて曰はく、「諾」と。問ひて曰はく、「甚没人か」と。曰はく、「知らず」と。又た曰はく、「大硬鏹」と。爛木対へて曰はく、「畏るべし」と。良久しくして、乃ち赤物の在る所を失す。遏階を下り、中庭に爛木を呼びて曰はく、「金精合に我に属ふべし、没に縁りてか敢へて叫喚す」と。対へて曰はく、「知らず」と。遏又た問ふ、「承前人を殺害せし者何れの処に在る」と。爛木曰はく、「更に別物無し。只だ是れ金精のみ。人の福自ら薄く、之に居るに合はず、遂に喪逝す、亦た曾て殺傷せざるのみ」と。

明くるに至り、更に事無し。遏乃ち自ら鋏鍬の具を假り、先に西牆の下に掘る。地に入ること三尺、一朽柱を見るに、心木に当たりては血の色の如く、其の堅きこと石の如し。後又た東牆の下に掘ること兩日、一丈に近づくに、方に一方石を見、闊さ一丈四寸、長さ一丈八寸なり。上に篆書を以て曰はく、「夏の天子紫金三十斤、有徳の者に賜ふ」と。

遏乃ち自ら思ふ、「我何を以てか徳と為す」と。又た自ら計を為して曰はく、「我此の宝を得、然して徳を修むれば亦た之を禳ふべし」と。沈吟して未だ決せず。夜に至るも、又た歎息して定まらず。其の爛木忽ち語りて曰はく、「何ぞ名を改めて有徳と為さざる、即ち可なり」と。遏曰はく「善し」と。遂に有徳と称す。爛木曰はく、「君子儻し能く某を昆明池中に送らば、是れより復た吾れ人を撓さず」と。有徳之を許す。明辰更に掘ること丈余、一鉄甕を得たり。之を開くに、紫金三十斤を得たり。有徳乃ち宅価を還し修葺し、爛木を昆明池に送る。遂に戸を閉ぢて書を読む。三年にして、范陽の為に請はれて幕に入り、七年の内に、冀州刺史を獲たり。其の宅更に事無し。

【語釈】

○天室 唐の第六代皇帝玄宗（在位は七一二―七五五）の年号。七四二年―七五五年。玄宗の治世後期にあたる。

○永樂里 永樂坊のこと。

朱雀門街の東側第二街、街東の北から南に向かつて第四坊である。『唐兩京城坊考』卷二「西京外郭城」参照。

○破 家産をつぶすこと。『史記』卷六十五「孫子呉起列伝」に、「其少時、家累千金。游仕不遂。遂破其家（其の少き時、家千金を累ぬ。游仕して遂げず。遂に其の家を破る）」とある。

○宿 一晚。○廢破 家がつぶれて荒れたままになるさま。

○舍宇 家屋。『管輅』《太平広記》卷四四七引『小説』

に、「魏管輅常夜見一小物、狀如獸、手持火、向口吹之、將熱舍宇（魏の管輅常に夜一小物を見る、狀は獸の如く、手に火を持ち、口に向かひて之を吹き、將に舍宇を熱やさんとす）」とある。

○堂庁 大広間。

○因生草樹甚多 会校本は、沈本に拠り「因之生草樹甚多」と「之」字を補う。

○扶風 郡名。現在の陝西省宝鸡市鳳翔県一帯。治所は雍県。

○蘇遏 未詳。

○慳慳 誠実なさま。『論語』泰伯篇に、「子

本稿は、『太平広記』 訳注（稿）——卷四百「宝」部金上（上）——
 （『高知県立大学紀要』 文化学部編第六一卷）、『太平広記』 訳注（稿）
 ——卷四百「宝」部金上（中）——（『高知県立大学紀要』 文化学部編
 第六三卷）、に続き、『太平広記』 卷四百「宝」部に訳注を施したもので
 ある。底本及び本稿で参照した主要な文献は以下の通りである。なお、
 作品番号は前稿の続きである。

〔底本〕

○李昉等編『太平広記』 汪紹楹点校 中華書局 一九六一年新版

〔主要参考文献〕

参照したその他の『太平広記』の版本

○張国風会校『太平広記会校』 北京燕山出版社 二〇一一年

○黄氏巾箱本『太平広記』 筆記小説大観 江蘇広陵古籍刻印社 一九
 八三年

○四庫全書本『太平広記』 上海古籍出版社景印 一九六九年

参照した白話訳

○陸昕・郭力弓・任徳山主編『白話太平広記』 北京燕山出版社 一九
 九三年

○周振甫主編『白話太平広記』 中州古籍出版社 一九九三年

○高光・王小克・汪洋主編『文白対照全訳太平広記』 天津古籍出版社
 一九九四年

○丁玉琤等主編『白話太平広記』 河北教育出版社 一九九五年

〔その他本稿で参照した主な文献〕

○李時人編校『全唐五代小説』 陝西人民出版社 二〇一四年

○李劍国輯考『唐五代伝奇集』 中華書局 二〇一五年
 ○許逸民校箋『酉陽雜俎校箋』 中華書局 二〇一五年
 ○『宣室志』 明商濬校刊稗海本 百部叢書集成
 また、ここに挙げた以外の参考文献は、随時本文中で触れた。

15 「蘇遏」

天寶中、長安永樂里有一凶宅、居者皆破、後無復人住。暫至、亦不過
 宿而卒、遂至廢破。其舍宇唯堂廳存、因生草樹甚多。有扶風蘇遏、恹恹
 遽苦貧窮、知之、乃以賤價、於本主質之。纔立契書、未有一錢歸主。至夕、
 乃自攜一榻、當堂鋪設而寢。一更已後、未寢、出於堂、徬徨而行、忽見
 東牆下有一赤物、如人形、無手足、表裏通徹光明。而叫曰、「咄。」遏視
 之不動。良久、又按聲呼曰、「爛木、咄。」西牆下有物應曰、「諾。」問曰、
 「甚沒人。」曰、「不知。」又曰、「大硬鏹。」爛木對曰、「可畏。」良久、乃
 失赤物所在。遏下階、中庭呼爛木曰、「金精合屬我、緣沒敢叫喚。」對曰、
 「不知。」遏又問、「承前殺害人者在何處。」爛木曰、「更無別物。只是金
 精。人福自薄、不合居之、遂喪逝、亦不曾殺傷耳。」

至明、更無事、遏乃自假鋤鍤之具、（具原作徒、據明鈔本改）。先於西牆下
 掘、入地三尺、見一朽柱、當心木如血色、其堅如石。後又於東牆下掘兩日、
 近一丈、方見一方石、闊一丈四寸、長一丈八寸。上以篆書曰、「夏天子
 紫金三十斤、賜有德者。」遏乃自思、「我何以爲德。」又自爲計曰、「我得
 此寶、然修德亦可禳之。」沈吟未決。至夜、又歎息不定。其爛木忽語曰、
 「何不改名爲有德、即可矣。」遏曰「善。」遂稱有德。爛木曰、「君子儻能
 送某於昆明池中、自是不復撓吾人矣。」有德許之。明辰更掘丈餘、得一
 鐵甕。開之、得紫金三十斤。有德乃還宅價修葺、送爛木於昆明池。遂閉
 戶讀書。三年、爲范陽請入幕、七年內、獲冀州刺史。其宅更無事。（出『博

【論文】

『太平広記』訳注（稿）
― 卷四百 「宝」部金上（下） ―

高 西 成 介

（二〇一六年九月二十九日受付、二〇一六年十二月十五日受理）

Translation with notes of *Taiping guangji* 太平廣記：

vol. 400, Bao-bu 寶部, Jin 金, shang 上, (part 3)

TAKANISHI Seisuke

(Received : September 29, 2016, Accepted : December 15, 2016)

要 旨

北宋初期に編纂された『太平広記』五百巻は、中国の小説研究や文化研究において大変重要な資料である。本稿は前稿に引き続き『太平広記』巻四百宝部に訳注を加えたものである。

キーワード

太平広記・「宝」部・訳注

Key words:

Taiping guangji, Bao-bu, translation with notes

Abstract

Taiping guangji 太平廣記, containing 500 volumes, was compiled during the early Northern Song Dynasty. These volumes are very important for the study of Chinese tales, and cultures, etc.

This paper is a translation with notes of *Taiping guangji* 太平廣記, vol. 400, Bao-bu 寶部, Jin 金, shang 上, (part 3)

所属・学位

高知県立大学文化学部 教授 修士(文学)

Faculty of Cultural Studies, University of Kochi, Professor (Master of Literature)